

農業農村工学会サマーセミナー2018 報告

Report of JSIDRE Summer Seminar 2018

○松田壮顕*, 浅田洋平**, 田中宣多***, 辰野宇大**, 大山幸輝****, 尾関竣哉*****,
関本幸一*****, 前田顕*****

○Soken Matsuda, Yohei Asada, Yoshikazu Tanaka, Takahiro Tatsuno, Koki Oyama, Syunya Ozeki,
Koichi Sekimoto, Akira Maeda

1. はじめに

サマーセミナーは、農業農村工学会本大会が開催される際に複数の大学から学生が集まり、農業農村工学に関するテーマの議論や、お互いの研究活動についての情報交換を行う学生主体の企画である。この発端は、1992年に発足したスチューデント委員会や学会事務局等の働きかけにより、他大学の学生同士の交流が活発となり、農業農村工学という同じ学問領域に属する学生同士が議論できる場を求める声が高まったことにある(中桐, 2015)。本企画は2013年以降一時的に開催が見送られてきたが、2016年に再開し、そして本年まで継続的に実施されている。19回目の開催であった昨年のサマーセミナー2018では、「平成ラストの若手交流、話したいことを話そう～日本の農業とセミナーの今後～」をメインテーマにディスカッションを行った。本稿では、その活動内容について報告する。

2. 2018年の活動報告

サマーセミナー2018は2018年9月6日～9月8日の期間に京都大学吉田キャンパス及び京都教育文化センターを会場に行われた。全国の8の大学から大学生と大学院生14名、さらに若手社会人3名の計17名が集まり、約3日間に渡ってディスカッションを行った。

昨年のセミナーでは、「①農業農村工学会とサマーセミナーを使おう!」、「②環境にやさしい農業を農業農村工学分野の視点から一つ考えよう」というこの二つのサブテーマ(議題)を通し、メインテーマについて考える場を設けた。各議題で時間を設けた上で1班4人程度のグループに分かれて議論を行い、最後に各グループが議論した内容を参加者全員に対して発表し、活発な意見交換を行った(Fig.1)。



Fig.1 グループディスカッションの様子
Scene of group discussion.

*京都大学大学院農学研究科 Graduate School of Agriculture, Kyoto University, **東京大学大学院農学生命科学研究科 Graduate School of Agricultural and Life Sciences, The University of Tokyo, ***京都大学防災研究所 Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University, ****鳥取大学大学院持続性社会創生科学研究科 Graduate School of Sustainability Science, Tottori University, *****大阪府立大学生命環境科学研究科 Graduate School of Life and Environmental Sciences, Osaka Prefecture University, *****北海道大学大学院農学院 Graduate School of Agriculture, Hokkaido University, *****宮崎大学大学院農学研究科 Graduate School of Agriculture, University of Miyazaki

キーワード：農業農村工学，広報，若手交流，サマーセミナー

①「農業農村工学会とサマーセミナーを使おう！」

サマーセミナーの議題として度々取り上げられているが、近年、大学で農業農村工学を専攻した学生が他の業界へ就職するケースが増加している。本分野の更なる発展のためには人材の育成や獲得が不可欠である。学会活動やサマーセミナーはそれに大きく貢献する可能性を持つことから、当議題では農業農村工学分野を盛り上げていく上で学会やサマーセミナーをどのように活用すべきかを議論し、改善案を作成することを目的とした。2018年度では特に「具体的な」活用法を提案し、実際に行う企画として成り立たせることに重きを置いた。その結果、スチューデントセッションの在り方、高校生に対する魅力の発信が主なテーマとなり多くの意見が出されたが、実現までには至らなかった。

②「環境にやさしい農業を農業農村工学分野の視点から一つ考えよう」

環境にやさしい農業を、ここでは有機農業をはじめとした、生産性の向上を図るとともに環境負荷が最小限となるように配慮された農業と定義した。学会の開催地が京都府であったことから、京都府が積極的に取り組んでいる「有機農業」に焦点を当て、身近に有機農業による農産物がない理由とその対策について意見を出し合った。理由としては、有機農業者が少ない、生産量が安定しない（少ない）などが考えられ、対策としては①初めて有機農業を始める人に向けたマニュアルの作成及びその説明会を開く、②各地域の特性を活かした小規模な有機農家を増やし点在化させる、また道の駅などを中心として流通ルートを増やすなどが挙げられた。

3. サマーセミナーの感想

同じ農業農村工学会に所属していながらも、他分野の学生と交流する機会は少ない。そのため、今回同じテーマについて様々な着眼点を持つ人々と議論をできたのは非常に刺激的であった。また、ディスカッションや懇親会（Fig.2）を通して3日間ともに行動することで、より一層深く交流を持つことができたのではないかと思う。このように他大学の学生と広くネットワークを構築できるという意味でも、サマーセミナーは非常に有意義な場であった。さらに私個人としては、セミナー後自らの研究に対するモチベーションが上がり、参加して良かったと強く感じた。サマーセミナー2018では、過去の回よりもディスカッションにかかる時間を増やし、より密に交流することができたという良い点がある一方で、その分意見をまとめることが困難であったなど、反省点もいくつかみられた。これからも、学部生、院生、若手社会人がお互いの意見を交換できるような貴重な機会を提供し続けられるよう、昨年のサマーセミナーで出た反省点を活かし、次年度の活動に繋がりたいと思う。



Fig.2 懇親会の様子
Scene of get-together.

謝辞：農業農村工学会事務局の方々、北海道大山本先生、大阪府大中桐先生、参加者の皆様には、サマーセミナー開催にあたりご協力頂いた。記して感謝申し上げます。

引用文献：中桐（2015）学生自主企画サマーセミナーの歴史，H27年度農業農村工学会大会講演会要旨集，54-55